2022年7月17日  川越教会

丸山　勉

この愛に驚き続ける

［エフェソの信徒への手紙3章14節～21節]

こういうわけで、わたしは御父の前にひざまずいて祈ります。御父から、天と地にあるすべての家族がその名を与えられています。どうか、御父が、その豊かな栄光に従い、その霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強めて、信仰によってあなたがたの心の内にキリストを住まわせ、あなたがたを愛に根ざし、愛にしっかりと立つ者としてくださるように。また、あなたがたがすべての聖なる者たちと共に、キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解し、人の知識をはるかに超えるこの愛を知るようになり、そしてついには、神の満ちあふれる豊かさのすべてにあずかり、それによって満たされるように。わたしたちの内に働く御力によって、わたしたちが求めたり、思ったりすることすべてを、はるかに超えてかなえることのおできになる方に、教会により、また、キリスト・イエスによって、栄光が世々限りなくありますように、アーメン。

[１]　「**へぇ、知らなかったー！**」

 　先日、こんな素敵な文章に出会いました。

**「少年少女各位。愚かな人間は、「知らなかった」が言えません。負けず嫌いで、常に人より上にいたい彼らは、知らなくても「もう知っている」と言い張ります。愚かじゃない人は、閉ざされた扉を開く、魔法の言葉を知っています。それはもちろん「****へぇ、知らなかったー！」。なんて美しく、わくわくする言葉。」**

私の好きなミュージシャン、**小沢健二**の言葉です（彼は詩人でもあります）。

　ある意味、「人生」を本当に生き生きとさせるもの、心の若さを保たせるものというのは、ここで小沢健二が書いているように「知らなかったー」と言うように、心が驚くこと、感動することだと思います。私は、本当は「信仰」というのは、感動の連続だと思います。しかしまた、信仰の世界ほど「もうそんなの分かっています」とか「一度信じてしまえばそれでいいでしょ」というような、形式的、惰性的なものになってしまいがちです。しかしそれは、神様という存在を、ポケットに入れてしまうようなものではないでしょうか。しかし、それでは神様は、生きていない「偶像」になってしまうのではないかと思います。

今、木曜日の「聖書の学びと祈り会」では、旧約聖書の「民数記」を読んでいます。実は私は「民数記」を読むのはちょっと大変だなぁと思っていたのですけれども、その前の「レビ記」もそうでしたが、なかなか発見が多くて面白いです。「民数記」は、エジプトを脱出した後、契約の民であるイスラエル民族が大移動をしながら神様が示される「乳と蜜の流れる地」に入っていくのです。彼らは文字通り神様の「恵み」を体験しています。「エジプトの奴隷の方が美味しいものも食べられた」なんて文句の言葉も口から出て来る中、神様はその民に愛想をつかすどころか、天から食物（マナ）を降らせて下さいました。それどころか民が「肉が食べたい」と言えば、たくさんのうずらを送って、その肉を食べることをお許しになって彼らの願いを叶えて下さったという事が書かれています。これは大変な神様からの「憐み」ではないでしょうか。「わたしは反抗する民に終日手を差し伸べていた」（イザヤ65:2）という言葉がありますが、常識を超えた神様の愛、それは旧約聖書の時代から変わらずにあるのですね。それにも拘らず、人間という存在は恵みに慣れてしまうのです。「へぇ～、驚いたあー！」と思えず、恵みを恵みとして感じられなくなってしまう。神様の御業への感動が消えていってしまうのです。それは「親の心、子知らず」ではありませんけれども、そんな私たちのことを神様は悲しまれていると思います。

[２] パウロは、教会のために祈る人

ですから、今日のエフェソの信徒への手紙の言葉の中でよく分かることは、著者である使徒パウロは、ここで祈っているのですね。パウロの、教会の仲間にされた者への祈りです。余談ですが、パウロのどの手紙でもそうですが、彼は必ず祈りの言葉を記しています。彼は思想家であり、神学者であると言えますけれども、一番大事なのは、彼は「祈る人」だったということです。今日の箇所でも「ひざまづいて祈ります」と言っています。そして、「ローマの信徒」「コリントの信徒」「フィリピの信徒」「コロサイの信徒」、「テサロニケの信徒」、そして今日の「エフェソの信徒」と、それらの教会に集めっている者たちへの祈り、それはとても深いものです。このような祈りに私たちはとても励まされますし、イエス様に結びつくということがどういうことなのかを常に新しく示してくれるものだと思います。是非、ほかの手紙の中のパウロの祈りも探して見てみて下さい。

さて、このエフェソの教会。紀元1世紀の新しい教会です。イエス様の福音が異邦人の人々の心もとらえて、共同体となり、フレッシュな喜びがあふれていたと思います。しかし、必ずしもそれだけではなく、「クリスチャン」と言っても人間同士の集まり、些細なことで色々なトラブルが起こっていたに違いありません。今の時代の教会と同じです。だからこそパウロは、この時、恐らくローマの獄中にいながら、祈ったのです。その言葉をもう一度見てみましょう。

「こういうわけで、わたしは御父の前にひざまずいて祈ります。御父から、天と地にあるすべての家族がその名を与えられています。どうか、御父が、その豊かな栄光に従い、その霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強めて、信仰によってあなたがたの心の内にキリストを住まわせ、あなたがたを愛に根ざし、愛にしっかりと立つ者としてくださるように。また、あなたがたがすべての聖なる者たちと共に、キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解し、人の知識をはるかに超えるこの愛を知るようになり、そしてついには、神の満ちあふれる豊かさのすべてにあずかり、それによって満たされるように。わたしたちの内に働く御力によって、わたしたちが求めたり、思ったりすることすべてを、はるかに超えてかなえることのおできになる方に、教会により、また、キリスト・イエスによって、栄光が世々限りなくありますように、アーメン。」

　この言葉を味わうだけでこの朝は十分だと思います。この言葉は、とてもスケールの大きな「祈り」ですね。毎週の礼拝の最後の祝祷の聖句（テサロニケ一5:23-24）が好きだと言われる方も多いですが、この言葉もとてもいいですね。信仰の確信と教会の人々に対する愛に満ちていると思います。私が特にこの中でユニークだなと思うのは「キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さ」（18節）という言葉です。パウロ正にこれを実感し、驚き、感動しながら語っているのだと思うのです。

[３] 自分の貧しさや弱さ、惨めさの中でこそ

加藤常昭先生（日本基督教団鎌倉雪ノ下教会元牧師、「説教塾」主宰）が、著書『み言葉の放つ光に生かされて』（一日一章）の中で「キリストの愛の大きさが分かる場所」という題で文章を書いておられます。その中で私は本当にそうだなぁと思った言葉があるのでご紹介しますが、こんな言葉です。―**「（キリストの愛の）広さ、長さ、高さ、深さ」が計れる場所はどこであろうか。外からでは計れない。そのなかに立って初めてわかる。キリストの愛は、それに包まれ、そのなかに招き入れられて初めてわかる。」**

これは鋭い指摘だと思います。この時パウロは、キリストの愛を、外から眺めているのではないのです。イエス様のご愛は、物差しをもって外から図ることが出来るようなものではない、そうではなく、その中に入った時、そこにすっぽりと包まれている時に、何と大きく深い愛の中に自分が生かされていることか！それがリアルに迫ってきます。パウロは、この3章でこの祈りの言葉の前に、こういうことを語っています。―6節以下です。「（神様の啓示は）異邦人が福音によってイエス・キリストにおいて、約束されたものを私たちと一緒に受け継ぐ者、同じ体に属する者、同じ約束にあずかる者となるということです。神はその力を働かせて、わたしに恵みを賜り、この福音に仕える者としてくださいました。この恵みは、聖なる者たちすべての中で最もつまらない者であるわたしに与えられました」。

彼は自分自信を誇っていないのですね。むしろ、「すべての中で最もつまらない者であるわたし」と言っています。どうしてこう言えるのか。彼は今囚われの身になり、狭い部屋の中に置かれながら、大きく広い愛、十字架の主イエス様を仰でいるのだと思います。わたしはまことに取るに足らない者、イエスなど自分には邪魔だと思っていた者、驕り高ぶって、自分がいっぱしの人間・エリートであるかのように錯覚し、他者をさばいていた者。そんな最もつまらない者のために、神の御子が自分のために命を献げて下さったのだ！そのことによって、「心の内にキリストを住まわせ、あなたがたを愛に根ざし、愛にしっかりと立つ者としてくださる」、そのことがこんな私の中にも起こったのだ、そしてあなたがたも同じでしょう、と言っているのです。イエス様は仰いました。「心の貧しい人々は幸いである。天の国はその人たちのものである」（マタイ5:3）と。そうです。自分の貧しさや弱さ、惨めさの中でこそ、イエス様の愛は本当に実感出来ますね。私たちはイエス様の愛に心震える、そういう信仰生活をご一緒に送りたいと思います。何度も神様を見失い不信仰に陥るイスラエルの民を忍耐強く導かれたお方は、今、「私は世の終わりまであなたがたと共にいる」という決定的な約束イエス・キリストを私たちのために送って下さったのですから！

これから歌う讃美歌はそのことを歌っています。遥かな歴史を経てゆるがない「千歳の岩よ、わが身を囲め」と歌います。「わが身をすっぽりと囲んで下さい！どんな悪魔の手立ても無力化されるその十字架の中に今私があることを教えて下さい」と祈りつつ歌いたいと思います。私たちがこの主の愛を日々新しく頂き、私たちの交わりも「祈りの群れ」として前進できますように。お祈り致します。

主イエス・キリストの父なる神様、感謝致します。あなたは人の思いを遥かに超えた大きなお方です。私たちは、人知を超えたあなたの恵みを頂いています。それなのに、すぐに目の前の事で心に波風が立ち、時には絶望的な思いに支配されてしまいます。どうか弱い私たちを憐れんで下さい。あなたの愛の大きさ、広さ、高さ、深さを教えて下さい。「今あるはただ神の恵み」です。そのことに驚き続ける心を与えて下さい。そしてこれからもあなたの十字架と復活という揺るがぬ岩の中に私たちを囲み、共に前を向いて進みことが出来ますように…。主イエス・キリストによって祈ります。アーメン。